

# 源流人会活動報告

源流学の森(ついで)

9月23日(土)

午前は源流学の森の整備という事で、草刈りと道直しを行いました。どこから入ってきたのか、ベニバナポロギクというキク科の外来種がたくさんありました。ところが、この植物、とってもおいしいんです。味は、菊菜をあっさりしたような感じで、刈りながらつまみ食いしてしまいました。午後からは、達っちゃんの刃物研ぎ講座(ノコギリ編)。前回の刃物研ぎ講座はナタガマでしたが今回はノコギリ。これがムズカシイ!でもなんとか切れ味鋭くなったような...



9月24日(日)

達っちゃんはお休みでしたが、別件で来ていただいた中平寛司さん(入之波)とお昼をいっしょしながら、三之公のお話や動物のお話などをうかがいました。中平さんは森の名手名人100人に大経木の伐採技術で選ばれた方で、村でも有数の猟師さん。そして誰よりも三之公に詳しい方です。興味深いお話がたくさん聞きました。帰りにはお宅におじゃまして、色々な道具も見せていただきました。

11月3日(金・祝)

「茶がゆパーティーしよう!」というのが今回の合言葉。ということで、小屋について、一息ついて茶がゆ準備スタート。おいしくいただいた後は、パーティーしながら、足りないと思っていたもの、ベンチやテーブルが欲しい!ということで、ベンチとテーブルづくりがスタート。これがなかなか大変で翌日に持ち越しということに...

11月4日(土)

この日も引き続き「茶がゆパーティー」。そして、ベンチとテーブルづくり。ベンチは何とか完成!ところが、テーブルは完成度を高めようと、とうとう職人技を駆使する展開に。次回へ持ち越し。こうご期待です。



# ぽたたい

源流のひとしづく

冬 第12号

発行所 ■ 財団法人吉野川紀の川源流物語 森と水の源流館

発行日 ■ 平成19年2月発行

TEL 0746・52・0888

## CONTENTS

- コラム
- 第8回 源流学講座
- 川上村見聞録⑨
- 吉野川・紀の川流域の遺跡 その3
- 源流の主役たち
- 源流人会活動報告
- 交流のページ

# 交流のページ

私が初めて川上村を訪れたのは二十歳の頃でした。もう35年になります。と言いましても始めの15年間ほどは沢登りや滝の登はんのための中継点としての通過訪問でした。柏木のバス停で乗換えのバスや川上タクシさんや待っていたり、食料の調達をしたりしてました(当時の電気屋さんや雑貨店、食料品店が懐かしく思い出されます)。当初は東ノ川や大杉谷がメインだったのですが、その後、入之波から上流の本沢川に通うようになりました。ところが、支流の黒石を詰めた帰りに不覚にも交通事故を起こしてしまい、それ以降、山行は難しくなり、川上村を訪れることは途絶えてしまいました。



「山好きは死ななきや直らない」のは本当で、子供たちが小学校の高学年になると、子供にボツカ(荷上げ)をさせて本人は大名登山することを思いついてしまったのです。そこで実行したのが黒石谷でキャンプをして、大台ヶ原も散策するというものでした。結局ほとんど同じプランを5年間続け、我が家の夏の恒例行事となりました。最近北アルプス方面にフィールドは変わりましたが、子供たちにとつての原点は黒石のキャンプにあると思います。

ところで、現在私は「こよく言います」とEarly Retire(早期退職)して、大学(学部)に通っています。学科は地理学で自然地理系のゼミに潜り込んでいます。現役の学生の頃から地理だけは得意で興味も強かったのですが、何故か理系に進んでしまったために、地理はずっと憧れの分野でした。そして今、最も興味のある分野は水分子学です。溪流と親しんできた経緯から現在の川はやはり問題が多いと思います。地理学という学問は本当になんでもありの幅の広い学問ですのでその特性を生かし、他の諸学問の研究の間隙を埋めたり、貼り合わせたり、そんな研究を行いたいと思っています。

川上村通いがまた始まりそうです。

会員No.186「澤 義明さん」より

## 森と水の源流館

住所 奈良県吉野郡川上村宮の平  
財団法人吉野川紀の川源流物語  
TEL 0746・52・0888  
FAX 0746・52・0388  
URL <http://www.genryuu.or.jp>  
E-mail [morimizu@genryuu.or.jp](mailto:morimizu@genryuu.or.jp)

## 源流人会募集中!

源流人とはかけがえのない水を生かす源流の自然を愛し、源流を守り、育てる人です。

源流人会は集い、話し、遊び、学び、考え、触れ、交流し、参加し、喜びを分かち合いながら、源流を守り、育ててゆこう!と志す会です。

ともに源流学を楽しく学ぶ仲間を紹介ください

年会費	個人	2,000円
	家族	3,000円
	学生	1,500円
	団体	10,000円

郵便振替 00940-1-331163



## 募金は次のような活動にあてられます

- 吉野川・紀の川の水について学ぶ副読本を作成し、流域の小学4年生に配布
- 「源流学の森づくり」事業
- 「水源地の森」の保全を呼びかけるための啓発用看板の製作と設置

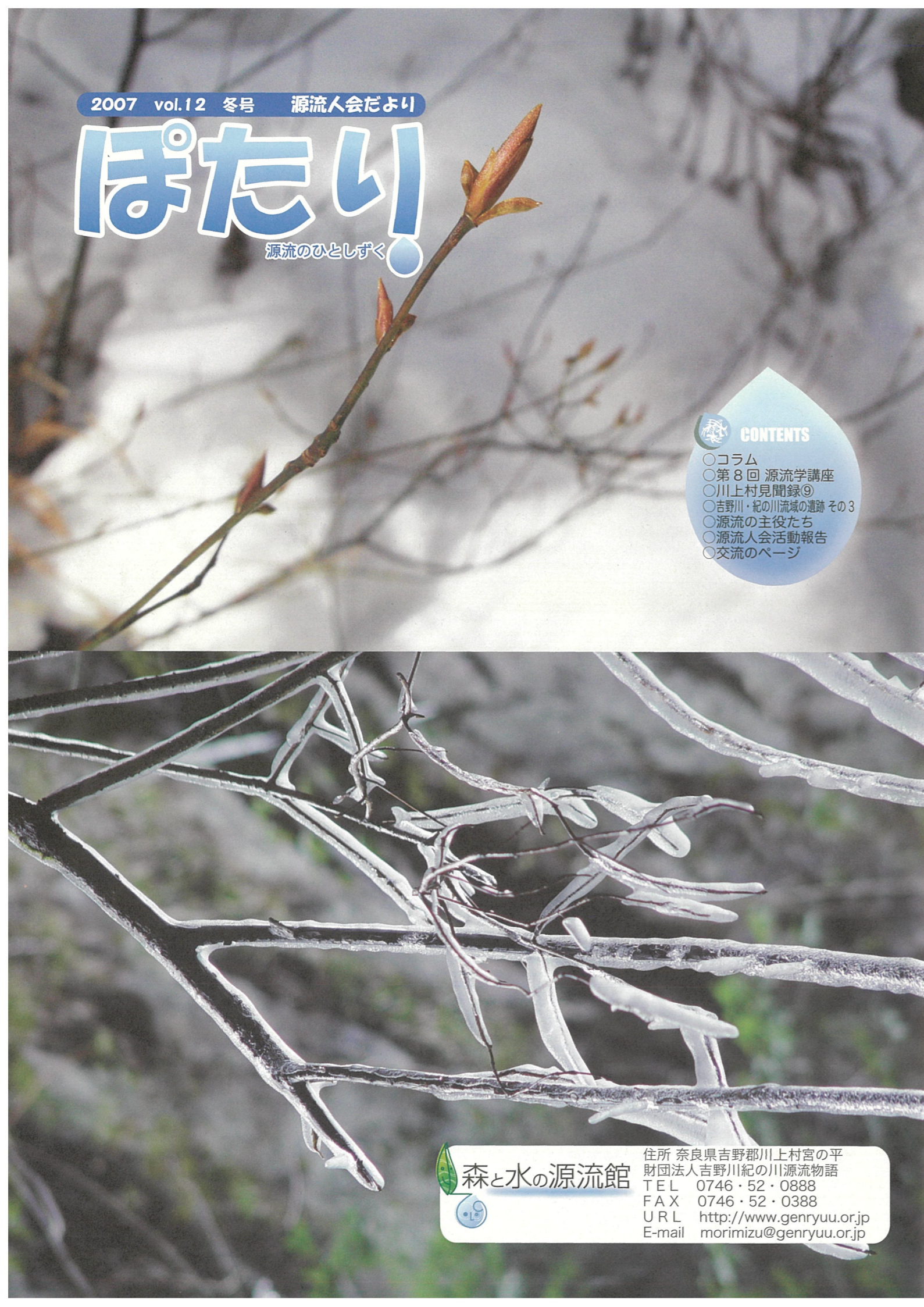
郵便振替

00950-2-331164 「水源地の森守募金」あて

2007 vol.12 冬号 源流人会だより

# ぽたたい!

源流のひとしづく



# 第3回 源流の主要たち



## ちいさい 地衣類



木村 全邦 (森と水の源流館)

### 1. 地衣類とは～コケなのにつけじゃない？～

地衣類って聞いたことはありますか？川上村の源流にもたくさんいますし、きつとみなさんの身の周りにも普通なありふれた生き物です。ただ、見ているものの、地衣類だと思って見る方はかなり少ないと思います。

地衣類はふだん、「コケ」といわれることが多いですし、和名も「〇×ゴケ」というのが一般的でコケ植物の一種のような名前です。しかし、生物学でいうコケ植物とはまったくちがうものです。では、なぜコケといわれるのかというと、そもそも「コケ」は「木毛」の意味で、木の毛のような生き物の総称として、生物学が生まれるずっと前から使われてきた歴史があります。そのため、小さくてよくわからない植物あるいは植物のようなものにコケの名前が当てられたのです。その名残を少しあげてみると、モウセンゴケ（湿地に生える種子植物）、クラマゴケ（シダ植物）、鮎の食べるコケ（藻類）、つるつる滑る岩のコケ（藻類）などがあり、ウメノキゴケやハナゴケなどで代表される地衣類はコケでないコケの代表ともいえます。

地衣類は二つの生き物が合わさって一つの地衣類と呼ばれる生き物になります。二つで一つって・・・なんじゃそりゃ？と思われるかもしれません。共生ということばを聞いたことはないですか？二つ以上の生き物がお互いに支え合って生きるという生き方です。地衣類は菌類（キノコやカビのなかま）と藻類の共生体なのです。

地衣類の体は菌類でできており、その内部に藻類が入りこんでいます。それぞれを共生菌、共生藻とよびます。共生菌は子嚢菌類と担子菌類が関係しますが、98%以上は子嚢菌類です。共生藻は緑藻のなかまか藍藻です。

菌類は自分で栄養を作ることができないので、多くの場合はみなさんがよく知っているカビやキノコのようにほかの生き物から栄養をもらって生活しています。藻類はもともと水中で生活しており、多くの場合、水がないと生きていけません。そのため、水中や水辺などで生活しているものが多いです。そんな二つの生き物がおたがいの足りないところを補足して助け合って生きているのが地衣類なのです。共生菌は共生藻に安定した生活場所と水分を与え、共生藻は光合成で作った炭水化物を共生菌の生活に利用させるというようにおたがいの足りない部分を助けあって生活しています。ちょうど、部屋を貸している大家さんと、家賃を払って部屋に住まわせてもらっている借り主との関係に似ています。

地球上に生育する地衣類は約2万種といわれています。このうち約1600種が日本から記録されています。現在でも多くの新種や日本新産種が報告され続け、2000種程度は生育していると考えられています。水源地の森を含めて、奈良県ではまだほとんど調べられていないので、どんな地衣類が生育しているのか興味は尽きません。



▲ 図1. アンチゴケ (葉状地衣・樹幹着生)



▲ 図2. ウスツメゴケ (葉状地衣・地上生)



▲ 図3. クロアシゲジゲジゴケ (葉状地衣・樹幹着生)



▲ 図4. クロアシゲジゲジゴケ (葉状地衣・樹幹着生)



▲ 図5. ハナゴケ (樹状地衣・地上生)

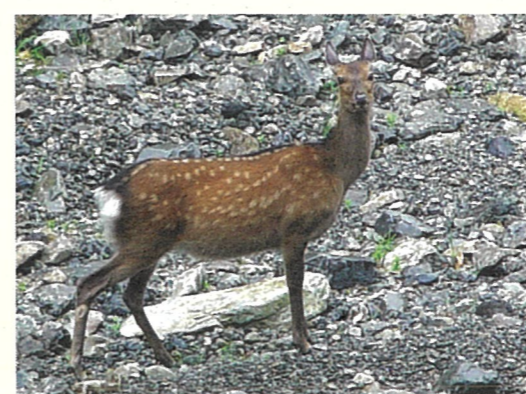
図1,3-5,8 (撮影: 安齊唯夫)、図2,6,7 (撮影: 木村全邦)



朝、猟師の家へ行き、猟の仕度をし、と言つても自分はリュックに水筒やタオルなどを入れるだけで、後は猟師の邪魔をしないように付いていくだけだが、林道を車で少し行き、そこからは谷を渡る橋を越えて徒歩で登っていくのだ。もちろん猟に同行するのは初めてだし、ドキドキしながら登って行った。山は積雪があり、途中、谷を渡る木の橋があった。木の橋なので腐りも進んでいる。足の踏むところが飛び飛びの横木が渡してあるそうだが、雪が20cmぐらい積もって見えない状態だった。もちろん、猟犬も2匹連れて行ったのだが、犬はさすがにうまく渡っていった。そこを渡るとだんだんと雪の量が増えてき

た。もうそれだけで「えらいところについてきたなあ」という思いになった。どれくらい歩いたか、猟師が「犬を放す。ここでおいよ」と言い、藪の下方に犬とともに消えて行った。しばらくすると、藪のほうでガサガサと音がしたかと思うと、鹿が駆け出した。斜面をまさに飛ぶように左方向から右方向にわずかな時間で走り去っていった。猟師が犬を放すまもなく飛び出したので、鉄砲で撃つことができなかったようだ。「出たか」「うん、飛ぶように行ってしまった」「もう少し、上へ行こう」斜面を這うように雪の積もった、そして藪の中を登ると、ようやく頂上付近に着いた。「右から、犬を入れて戻ってくる。」と言つて、すばやくいなくなつた。自分は息を整えるのに精一杯だった。するとまたガサガサと音がしたので「鹿が飛び出してくる。」と思つて息を潜めていると、大きくて、色は真っ黒で、大

きな角を持った雄鹿が目の前に現れた。「わあー、おつきいで！」思わず叫んでしまった。「どっちへ行つた？」「あつちの方や」聞くが早いのか、遠くが見通せる場所に向かつて行った。鹿の走っていく方向が、いや逃げる道がわかつているのか、そこに狙いを絞つたようだ。そのとき、下の方からまたガサガサと音がして、今度は小さな鹿が現れた。「こつちにも、鹿出て来た！」「なに！」と戻ってくるや否や「バーン」と音がした。鹿は、その場にうずくまつた。猟師は、またさっきの場所に戻つた。自分はうずくまつた鹿を見ていた。すると「バーン」と音がした。しばらくして戻つてきて「遠かったが当たつたと思う」「速くて見にいけんあ」「さばこか」と言つて目の前のうずくまつた鹿の方に向かい、ナイフを出した。「足持つといてくれ」「えっ」と言つたものの、手伝いに来ているのにと、我慢をして言われるようにした。雪の積もる中で作業で、手が冷たくなるとさばいている鹿の体の中に手を入れ温めるそう。手際よくさばいて行く。それをリュックに入れて猟師の家に向かつた。「今日は、3匹も鹿を見た。猟に向いているかも」



(坂口泰二)

「ラッキーやつたね」ようやく家に着いた。「料理するからまつとれよ、セミ(背中の肉)はたたきにするか？さしみにするか？」「どつちも。肝も食べれるん」と勝手な注文をして待つていた。この後は、おいしいお酒とともに鹿を堪能させてもらつて家路に就いた。貴重な経験をさせてもらった上に、おいしく食べさせてもらい、お土産に後ろ足の片方をもらつて帰つた。貴重な経験は一度きりとなつたが、猟師との付き合いはしばらく続き、シシ肉や保存してあつた夏ジカなどを「冬の味覚」として何度か味わわせてもらった。久しぶりに猟師に声を掛けてみようかなあ。



# 源流学講座

第八回

## 山小屋づくり

外装と窓も入り、内装も出来上がったので、床と囲炉裏づくりに取りかかる。まず、土間を半分仕切る。土間の中心から入口側半分は土間のままで置き、残り半分は床をあげ、真ん中に1m四方の囲炉裏をつくることにした。床をつくる手順は、まず一番下は大引という材を柱に取り付ける。大引の上には根太という材を乗せる。その上に床板を張って床が出来上がるのであるが、大引、根太、床板の材料は丸太では水平を出すのに難しいので、角材を使った。大引は10・35cm角、根太は4・5cm角、床板は1・5cm厚みの杉板を使った。さすがに達っちゃんも床だけは水平機を使って正確にレベルを出す(夜寝て、朝気が付いたら部屋のすみに転がって話にならない)。丸太と角材の取り付けは非常に難しかったが、出来上がりを見て、達っちゃん「にっこり」する。今まではほとんど目だけであ、ハハハハ。

次は、床張りの時に1m四方空けておいた場所に囲炉裏をつくる。つくる手順は、まず、最初に床の高さまで土を入れるので四方に土を止めるための板を打つ。次はその囲いの中に土を床の高さまで入れる。このとき、土が囲炉裏の火の熱で乾燥して下にずらないようにしつかりと上から丸太でたたいて、よく土をしめながら入れていくように注意する。土を床の高さまで入れ終わると外側の四方にレンガを立てて並べる。今度は、炭火や燃木が囲炉裏の外に出るのを防いだり、煮たり、焼いたりした食材や容器を置いたりする板を、レンガを並べた外側に四方に取り付ける。20cm×4・5cmのものを使う。

囲炉裏の真ん中に三徳(さんとく)といつて鉄の三本足で高さ20cmぐらいの物を置く。三徳の上には煮物をするナベや焼き物に使うアミ、茶ビン等を置いて、炭火を利用するときに使う。火を炊いて煮炊きをする場合に使うのは自在鍵(じざいせん)といって、上からつるして火熱に合わせて高さを調整できる道具である。自在鍵はつくるのには時間がかかるので買求めた。白状するとあまり難しいのでつくるのをやめた次第、ハハハ。

囲炉裏の真上、高さは立って手が届く位置に囲炉裏の幅より少し広いめのタケでつくった火棚(ひだな)を天井より下げる。火棚の上には煙でいぶす物などを置いた。昔は山の道具の柄に使う檜(ひの)の木などを乗せたものである。これで火を炊いて煮炊きはいつでもOKである。畳も一部敷いたので、寝ることも出来るようになった。

しかし生きるために必要不可欠な水がない。余っていた黒いパイプがあったので、早速それで150mぐらい上流の谷の水を引くことにした。昔、山小屋宿りをしていた頃を思い出し水は簡単にま

### 2. 地衣類のかたち

地衣類の体を地衣体(ぢいたい)といいます。地衣体には大きく分けて3つのタイプに分けることができます。下記の説明と図を見て何となくでもつかめてくると思います。

- ① 葉状地衣類(はじょうぢいりゆう) 図1~4 

木の葉やキャベツの葉、ゼニゴケのように平たい形をしているもの
- ② 樹状地衣類(じゆじょうぢいりゆう) 図5~6 

木あるいはひものような形をしているもの
- ③ 痂状地衣類(けじょうぢいりゆう) (固着地衣類) 図7~8 

木や石の上にペンキを塗ったように、あるいは模様のように基物の表面をうすくおおうもの



▲ 図6. ヤマトキゴケ (樹状地衣・地上生)



▲ 図7. ヘリトリゴケ (痂状地衣・岩上着生)



▲ 図8. チブサゴケ科の一種 (痂状地衣・樹幹着生)

### 3. 地衣類の増え方

地衣類の繁殖(はんしよく)方法は2つの方法があります。体はそもそも菌類(きんりゆう)ですから、胞子(ほうし)によって増える方法があります。この場合、胞子は適当な環境(きんがく)で発芽(はつが)し、さらに適当な藻類(もくろ)と出会うことがあれば、地衣化(ぢいけ)して、大きくなります。しかし、藻類と出あわなければ死んでしまいます。地衣類の科や属などのグループごとにペアをつくる共生藻(きんせいそう)の種類(しゆしゆ)はおおよそ決まっています。おもしろいことに、自然界では共生菌(きんせいきん)と共生藻(きんせいそう)が出逢(であ)って地衣類(ぢいりゆう)になりますが、実験室(じけんしつ)でいっしょにしようとしてもなかなかうまくいきません。

もう一つは粉芽(こな)による方法です。粉芽(こな)は地衣体(ぢいたい)の表面(へいめん)に噴き出したまさしく粉(こな)のようなもので、簡単に言えばクローン(クローン)を作るための粉(こな)です。強風(きやうふう)に飛ばされたり、雨(あめ)に流されたりします。粉芽(こな)には、はじめから藻類(もくろ)が入っているので、胞子(ほうし)で増やすより確実(かくじつ)な方法(はうほう)です。

### 4. 地衣類の利用

地衣類(ぢいりゆう)を用いた染色(せんしよく)はヨーロッパ(ヨーロッパ)では古くから行われていました。日本人(にほんじん)に一番なじみがあるものではリトマス試験紙(しけんし)も地衣類(ぢいりゆう)で染めた紙(し)を利用したものです。これはその名もリトマスゴケ(リトマスゴケ)という地中海沿岸(ちゆうがく)に生育(せいよく)する地衣類(ぢいりゆう)を利用したものです。ただし、最近(さいきん)ではリトマスゴケ(リトマスゴケ)が希少(きせう)になって、化学物質(けがくぶつ) (アリニン)を使うことがほとんどです。日本(にっぽん)ではウメノキゴケ(ウメノキゴケ)で代用(だいよう)することも可能ですので試(し)してみてもいいです。イワタケ(イワタケ)は山菜(さんさい)の中でも珍味(ちんみ)として名高(な)いですが、これも地衣類(ぢいりゆう)です。余談(よだん)ですが、北極圏(きたきょくけん)でトナカイ(トナカイ)の食べるコケ(コケ)は本当(ほんとう)のコケ(コケ)ではなくトナカイゴケ(トナカイゴケ)というハナゴケ科(ハナゴケ科)の地衣類(ぢいりゆう)です。ちなみに本当(ほんとう)のコケ(コケ)を食べても消化(しょうか)できないそうです。

最近(さいきん)では大気環境(たいきかんがう)に鋭敏(えいびん)な性質(せいしやう)を利用して、特に都市部(としぶ)の大気汚染(たいきおせん)の指標生物(しひょうせいぶつ)として利用(りよう)され、各国(こくご)でさまざまな研究(けんきゆう)がされています。例えば窒素酸化物(しつそさんかぶつ)がどれぐらいの濃度(濃度)で存在(そんざい)するかを測(と)ることは可能(可能)ですが、大気汚染(たいきおせん)は複合(ふくごう)した汚染物質(おせんぶつしつ)によって引き起こ(おこ)されています。そんな汚染物質(おせんぶつしつ)全て(すべて)を測定(さいてい)するのは大変(たいへん)です。その点(てん)で、生き物(いきもの)を使った測定(さいてい)方法は複合(ふくごう)された様々な要因(よんいん)に反応(はんおう)するので有効度(ゆうこうど)が高い(たかい)として注目(ちゆぼ)されています。

一見(いちけん)地味(ぢみ)ではありますが、身のまわり(まわり)でがんば(ばんぱ)っていて、結構(けつこう)身近(みぢな)な地衣類(ぢいりゆう)です。たま(たま)には注目(ちゆぼ)してみてください。きっと世界(せかい)が広(ひろ)がりますよ。

参考図書  
朝日新聞社(1996)「週間植物百科 植物の世界」138号  
福井県植物研究会(編)(2002)「福井のコケと地衣・[補遺]」福井県  
岩月善之助・伊沢正名(1986)「しだ・こけ」山と溪谷社  
中村俊彦・古木達郎・原田浩(2002)「野外観察ハンドブック 校庭のコケ」全国農村教育協会  
日本地衣学会(編)(2002)「地衣類入門」  
吉村庸(1974)「原色日本地衣植物図鑑」保育社



川上生まれ川上育ちの達っちゃん(辻谷雄雄館長)は、50年以上の山仕事のベテラン。その長い人生の経験から、自然とともに生きる力や知恵などを笑いのエッセンスを加えてお届けします。

かかせた。昔(むかし)から水(みづ)を引(ひ)くことを「まかせ」と言った。水(みづ)はパイプ(パイプ)一杯(いっぱい)に湧(わ)ぎ出してきた。早速(さつそく)、茶ビン(ちやびん)に水(みづ)を入れ、囲炉裏(いろり)に火(か)を入れ三之公山小屋(さんこうやまごや)「源流(げんりゆう)のやど」の最初(さいしょ)のお茶(おちや)、おいしいお茶(おちや)、アツアツアイ・・・。

次(つぎ)回は流(なが)し台(だい)と源流(げんりゆう)のカワヤ(カワヤ)を紹介(しょうかい)します。



▲ 床板(とこい)を根太(ねた)に打ち付けているところ



▲ 三徳(さんとく)の上にアミ(アミ)を置いてモチ(モチ)を焼(や)いているところ



▲ “源流(げんりゆう)のやど”の火棚(ひだな)



▲ 大引(おおいび)と根太(ねた)(上の細い角材(こま)が根太、それを支(た)えている太い角材(こま)が大引)



▲ 自在鍵(じざいせん)



▲ 天明(ていめい)の家に展示(ていし)している火棚(ひだな)

\*このコーナーでは、民俗担当の黄瀬桂子が村で見たこと聞いたことを「川上村見聞録」として紹介していきます。

## 「東熊野街道②」

奥吉野川上村に連なる山中では、古来からの東熊野街道が今も“現役”で使われています。この東熊野街道は、吉野と熊野を結び、さまざまな歴史を育んできました。

『ぼたり』11号では、明治という時代を切り開く魁となった天誅組の志士らを取り上げましたが、今号では、7月9日に開催した民俗講演会第12回いろいろりばた教室「東熊野街道ウォーク」の資料より、後南朝の悲運の皇子らにまつわるエピソードをご紹介します。



▲ 橋将監の墓 (伯母谷)

●東熊野街道と後南朝のはなし  
歴史の闇に葬られた陰の天皇史が川上村に伝わる。

室町幕府を開幕したものの、足利尊氏と対立した後醍醐天皇は、吉野山に朝廷を移し、南北朝時代が始まった。その解決法として北朝と南朝が交代で天皇をたてる約束をしたが、北朝が約束を破った。怒った南朝方は川上村に住まい、南朝回復の機会を窺った。これが南北朝時代の後の時代、歴史の闇に葬られた「後南朝」のはじまりである。

その後南朝も、長祿元(1457)年12月2日北朝方の謀略によって、上北山村の御所にいた皇子の自天王らが悲運の死を遂げ、終焉を迎えることになる。皇子の最期にまつわる言い伝えを村の古老に聞いた。

北朝方の赤松家の残党は、上北山村小椋に住み込んで土地の者にまぎれて自天王の命を狙っていた。ところが自天王には影武者がいて、どっちが本物かわからない。ある日、集落の者から「顔の洗いが影武者は違うんや」という話を聞く。自天王と影武者では、顔を動かして洗うのと、手を動かして洗うのと、洗いが違うと言っや。それで本物の自天王が判って、殺害されてしまうたということや。



▲ 朝拝式 (高原・福源寺)

北朝方の赤松家が、皇子の御首を京に届けるため東熊野街道を通って川上村に入ったとき、伯母谷の土豪、橋将監の檄によって村内の郷土が立ち上がり、北塩谷にて弓の名手、大西助五郎が赤松家の頭領を射止め、御首を奪い返した。このとき、御首を載せた石があつたが、昭和34年に伊勢湾台風の大水で流失し、現在、記念碑が国道169号沿いに建っている。

南朝再興の悲願は成らなかったが、村人らは自分たちが愛してやまなかった悲運の皇子らを偲び、皇子らの死後毎年欠かさず、2月5日に悲運の皇子らを偲ぶ「朝拝式」を行ってきた。平成19年2月5日には、ちょうど550年の節目を迎

える。  
前出の古老は続ける。

そんなことで、川上村は皇室に労があつたということ、まあ、今の天皇家は北朝やけれども、戦前戦中なんかは天皇の御真影が、村に贈られつつたんで。それも明治、大正、昭和と天皇が変わるごとに贈られてた。こんなこと全国でもあんまりないと思うわ。役場の奥に御真影室があつたもんな。小学校にも全部御真影があつたよ。

東熊野街道には、後南朝史という“闇の歴史”と、どういうわけかいつも弱者の味方をしてしまう村人らの優しさが人知れず刻み込まれているのである。



▲ 有志による街道直しの様子

# 吉野川・紀の川流域の遺跡 ~その3~

歴史担当の成瀬匡章が、吉野川・紀の川流域の遺跡について紹介します。

## 「一字一石経塚 柏木地区の松雲寺」

柏木地区の松雲寺には高さ3メートル程の宝篋印塔という石塔が建っています。この石塔はもともと大御堂(旧柏木保育園)に建てられていたものと伝えられています。

いつ現在地に移されたのかは不明ですが、この塔を移動する際、經典の文字を書いた小石が多数出土したそうです。

このような小石に經典を記し埋納したものを一字一石経塚と呼んでいます。一字一石経塚は経塚の一つの形式で、小石に經文を書き写し(これを經石と呼びます)、埋納したもので、全国各地で見ることができます。この形式の経塚は、造営者に貴賤の区別がみられないのが特徴で、和歌山市和歌浦の妹背山海禅院では後水尾天皇(在位1611~1629)や紀州徳川家が納めた經石が多数発見されています。

一字一石経塚は吉野川流域では、特に川上村に集中する傾向が見られ、法昌寺(伯母谷)・金剛寺(神之谷)・ナメキ遺跡(下多古)・青林寺(武木)・宮の平遺跡(迫)・法泉寺(北塩谷 現在、地区の墓地内に移転)・運川寺(東川)の8箇所で見つかっています。また、大塔神社(瀬戸)には「法華經読誦碑」、白川渡墓地には「書写供養碑」などが見られます。一方、流域市町村では、奈良県側の流域の市町村史でしか確認していませんが、ほぼ確実なものとしては、下市町で3箇所、五條市で5箇所確認されているだけです。

一字一石経塚は、多くの場合「一字一石」や「石書」「石経」という文言や、造営者、造営年月日、目的を記した石碑や石塔(経塚と呼びます)が建てられています。松雲寺の石塔にも天保二年九月(1831年)に六保(上多古・北和田・粉尾・中奥・瀬戸・柏木・神之谷・上谷・大迫・伯母谷・入之波)の人々によって造営されたことが記されています。



▲ 大御堂跡(松雲寺経塚の原所在地)

ただ、松雲寺の石塔には「一字一石」や「石書」といった文言が見られず、經石の出土伝承がなければ経塚と分かりません。一方、神之谷の金剛寺にはほぼ同じ石塔が見られますが、こちらには經石の出土伝承がなく経塚かどうか判断できません。このように、銘文だけでは判断できないものもあります。また遺跡として認識されていないものも多く、五條市大野新田町で踏査中、「奈良県遺跡地図」や「五條市史」に掲載されていない一字一石経塚を確認したこともあるので、実際にはもっと多数存在しているのかも知れません。

一字一石経塚は当時の人たちの信仰についてのいろいろな情報を与えてくれるので、もっと注目していきたい遺跡です。

### 参考文献

- 奈良県教育委員会文化財保存課(編) 1969 大滝ダム関係地民俗資料緊急調査報告 奈良県教育委員会文化財保存課 奈良
- 川上村史編纂委員会(編) 1989 川上村史通史編、川上村教育委員会 奈良
- 日本石仏協会(編) 1986 日本石仏図典 国書刊行会 東京